

櫻井克聡：藻類学ワークショップ2「藻類採集観察会」に参加して

藻類学ワークショップ2「藻類採集観察会」は、日本藻類学会第35回大会期間中の2011年3月28日～30日に、石川県能登半島において開催されました。能登半島は日本海沿岸で最も海藻利用が盛んな地域であるそうです。採集・観察の場となった九十九湾は静穏な環境のリアス式海岸で、海藻植生が豊かであると聞き、同じ日本海沿岸である山形県海藻植生をテーマとしている私にとって、知識を深める良い機会と考え参加しました。

初日は移動日となり、二日目に宿泊させて頂いた金沢大学臨海実験施設の対岸に位置する、のと海洋ふれあいセンターで海藻の採集・観察を行いました。静穏域のガラモ場は、いつも見慣れている外海の藻場とは大きく異なると聞いてはいたのですが、実際にスノーケリングで潜って観察したガラモ場は圧巻でした。入水する場所を探すのに大変なほど、見渡す限りにホンダワラ類が密に群落を形成し、水面まで達しているために水深も判断しづらく、沖へ移動するにも水面を這い、ガラモが絡まないように進むしか方法がありませんでした。少し沖に出てある程度の水深より深くなると泳げるスペースもあり、わずかながらパッチ状に点在する砂礫底で潜ると、その大規模なガラモ場を立体的に観察することができ、ようやく種の判別や下草の観察が可能となりました。水深3m程度の箇所ではジョロモク、ヨレモク、アカモクなどが水面付近まで伸長し、その下草にはツルアラメやハバモドキが、ホンダワラ類の上にはエゴノリ、モズクが生育していました。観察した範囲のガラモ場は、紅藻類が非常に少なく、ほぼ褐藻類で構成されていました。外海でしか潜水調査を行ったことのない私にとって、同じ日本海沿岸で、しかも同じ種でもここまで異なるのだと身をもって実感させられた観察でした。

三日目は、輪島市の朝市で海藻類の流通を見学し、珠洲市に移動後、昼食に海藻しゃぶしゃぶ、最後に海藻を用いて糸を染色する能州紬の見学を行いました。朝市では、ズワイガニやイカナゴなどの乾物に加え、ほとんどの露店で加工された海藻が販売されていました。ヒトエグサやツルアラメ、ウップルイノリ、ツルモノなどが加工品、乾物として並んでいる様子には、能登では海藻の利用が古くから盛んであり、その文



海藻採集の様子

化が根強く残っているのだと深く感動しました。昼食の海藻しゃぶしゃぶは、私にとって最も印象に残っており、海藻を粕汁にくぐらせて食べるというものでした。今回、私達が食した海藻はツルアラメ（かじめ）、アカモク、ホンダワラ（ぎんばさ）、ウップルイノリ（岩のり）、ひとえぐさ（あおさ）、ワカメの6種でした。他にも、ハバノリ（はまな）やツルモノなどもしゃぶしゃぶとして食されるそうです。この海藻しゃぶしゃぶは、さっと湯にくぐらせるだけなので食感が良く、粕汁との相性もよく非常に美味しい料理で、海藻利用が盛んな能登ならではの味を堪能させていただきました。最後に見学させて頂いた能州紬は、海藻で絹糸を染色することで独特の色つやを出しているそうです。用いる海藻は、浜に打ち上がった海藻であるため、日々異なる状態になり、能登の美しい夕日を織物に再現するために苦心して構築された技術であるそうです。

ワークショップに参加するのは初めてだったのですが、今回の参加は、私にとって非常に有意義なものとなりました。能登半島の豊かな海藻植生、食文化から織物といった広い海藻利用を実際に体験したことで、自らの研究も広い視野を持つて行うことができるようになるのでは、と感じました。懇親会では、各大学の先生方、企業の方、学生と異なる立場の方々と意見交換をすることができ、自分とは異なった考え方や、専門外の研究について学ぶことができたと同時に、自分の大学院生としての質の低さ、勉強不足も実感する機会となりました。今後は、自分の研究分野はもちろん、専門外の分野も幅広く学び、今回よりも更に深い議論を行えるようにしていきたいと思います。また、今回のワークショップのような、様々な方々と知り合うことができる場に今後も積極的に参加していこうと思います。

最後に、ワークショップ2の企画・準備・運営にご尽力下さった東京海洋大学の藤田大介先生、宿泊でお世話になった金沢大学臨海実習場の方々、のと海洋ふれあいセンターの方々、訪れた場所でお世話になった方々に深く感謝致します。

(東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科)



海中のスギモク群落の様子